

### 第3部 全体討論

大友良英

(音楽家)

藤井 光

(現代美術家)

水出幸輝

(同志社大学社会学部メディア学科)

飯田 豊

(立命館大学産業社会学部)

美馬達哉

(立命館大学大学院先端総合学術研究科)

マーティン・ロート

(立命館大学大学院先端総合学術研究科)

有馬 恵子

立命館大学大学院先端総合学術研究科／日本学術振興会)

有馬／はじめに、ここまでの感想をパネリストの方からいただきたいと思います。まずは大友さんからお願いします。

大友／それぞれとてもおもしろかったです。自分がやっていることが何なのかを考える機会になりました。忘却の話題もたしかにそうだと思いますし、メディアの話もそうです。

藤井さんのお話で印象に残ったのは、差別の問題です。僕もずっと引っかかっているのですが、なかなか手を出せずにいるところで。また、コロナによって震災当時のことを思い出したのも事実です。僕自身、何十年も引っかかり続けているけれど解決できないままにいる差別の問題を抱えています。それはもはやライフワークなのですが、どうしたらいいだろうかと考えながら聞いていました。漠然とした感想ですが。

藤井／僕も感想になりますが、今、大友さんが差別の問題をずっと考え続けているとおっしゃっていました。この問題と、最初のメディアの問題やコミュニティメディアというものがある社会のオルタナティブなものやマージナルなものにフォーカスする部分もあったり、そういう声を聞いていくとか、全体がつながっている話だなと思いつながりながらお聞きしていました。

飯田／第2部で藤井さんが話していたとおり、どのようにすれば議論の場が作れるかというようなことは、学問

的には震災前にいろいろと議論されてきたと思います。特に、サイエンスコミュニケーションの領域であれば、コンセンサス会議の作り方であったり、深刻な問題であってもワークショップ的なやり方で、どうやってフェアな議論の場を作るか、というようなことです。しかし東日本大震災が起こったとき、そういうスキームは無力というか、あまり役に立たなかったという印象があります。議論の場の作り方をきちんとアップデートしていかないといけないと今日のお話を聞いて改めて思いました。

それと、ロート先生がおっしゃっていた「忘却の能動性」という話について、感想を言います。生活者がその取捨選択をどうするかという問題がある一方で、歴史研究者としては、アーカイブが整備されてきたおかげで資料が膨大に残されることになって、文化財保護でも同じ議論があると思いますが、その中から何を拾って何を拾わないのかという選択の問題があります。稀少な資料をきっちり掘り起こすのとは違う考え方で、歴史研究者としてある種の責任を負って取捨選択していかないといけない。これをどう考えていくべきかと悩みながら、資料の海で泳いでいるような、溺れているような日々です。

水出／僕も「忘却の能動性」についてです。関東大震災は、やはり有用な事例だと改めて思いました。当時は震災後に帝都復興祭というお祭りをやって、過去語りしようとする明確な意思がありました。それは忘れようとする営みですよ。しかし、現代ではメディアも多様になり、さらに、さまざまな文脈で残そうとする動きが存

在している。忘却しようとする人たちもいるとは思いますが、社会のリズムとしてどのように想起のタイミングや文脈を維持していくのか、いろいろと考えさせられます。

みなさんの報告をお聞きして、自分が博士課程の研究でやっていたことがさまざまな分野や研究にリンクするような感覚があり、とても刺激的でした。

有馬／ここまで「忘却の能動性」というテーマがパネリストの方から共通して出てきました。先ほどロート先生が問題提起されたことですが、もう一度ご説明いただけますでしょうか。

ロート／今日のみなさんの発表や対談を伺って、印象に残った点として挙げたまでなのでまだまとまっていませんが、「能動的に忘却する」ことについて、藤井さんの発表ではそれが必要だという印象をもちました。当事者たちの「もう思い出したくない」「もうたくさんだ」という声についてのご指摘は、非常に重要だと思います。

それと同時に、メディアや公共圏において広がる各言説などは、記憶を管理するわけではないかもしれませんが「記憶を操作する」ことは常に起こっている。そういう意味で「忘却する」ということは、2つの側面を持っている。そういった「二重化した忘却の能動性」についてこれから考えていきたいなと思いました。

この場でこれ以上言えることがあるかどうかわかりませんが、少なくとも制度化において記憶が残ることもあるのではないかと考えます。たとえば、震災の対策としての避難訓練はその一例であると思います。そういった制度化がどのように忘却とつながっているのかも含めて考えないといけない。つまり、「構造的な忘却」と「構造的な記憶」というものがあるのではないかと思います。この視点は、メディアの重要性にもつながると思います。また、メディアだけではなくさまざまなレイヤーにおいて、記憶と忘却が常に繰り返されているのではないかなと思います。まとまりのない話で申し訳ないですが。

有馬／美馬先生からは第1部の大友さんと藤井さんの対談へのコメントの中で、記憶について、「持続」ではなく「切断」なのではないかというご指摘がありました。それについてもう一度お話いただけますか。

美馬／その点をもう少し掘げますね。これは、飯田さんが発表で少し触れたソーシャリー・エンゲイジド・アー

トとその受容をどう見るか、というところにも関わります。「プロジェクト FUKUSHIMA!」自体は、いろいろな人を巻き込んでいて、ある種メディアミックスのイベントというひとつの「プロセス」でした。今現在の私たちはそれ自体を生で体験することはできないし、準備まで含めたプロセスや同時多発的に行われたイベント群の全容を知ることができません。その中でみなさんが見たとおり、映像作品がある種の編集を経たものとして残っているわけです。「プロセス」として、生きられた経験としてあった「プロジェクト FUKUSHIMA!」を、「祭り」と言うのは言い得て妙だと思います。

その文脈の中で、現在形で受け取られたもの、感じられたもの、生み出されたものと、映像作品として過去形で残ったもの——これは10年残るかもしれないし、100年残るかもしれません——、そのあいだにズレがある、ということです。100年というスパンになると、そのズレを体験した人はほとんど亡くなっていて、直接語る語り部はほぼいません。忘却されたり、記念日として残るだけになっているとき、その「切断」は、現在の私たちが安易に想像したり、感情移入して語ることができないのではないのでしょうか。そうした記憶だけではなく感性にも生じるズレについてどう感じるのかを大友さん、藤井さんにお聞きしたかったのです。

さらにもう1つ話題をつなげると、大友さんは音楽をしようと思ったわけではないけれど、福島へ行ったら結局音楽をやることになっていたと言われました。その「しようと思わなかった音楽」と「結局やっていた音楽」はどう違うのだろうか、その違いは何なのだろうかと思います。このズレもまた、編集された「作品」と生きられた「プロセス」ということになるのか、それとも違うものなのか。そのあたりをお2人に伺いたいところです。

藤井／美馬先生のご指摘についてですが、「プロジェクト FUKUSHIMA!」というプロジェクトの「プロセス」のすべてを映画ではとらえきれはけません。僕が目撃したプロジェクトの断片の記録であり、それらばらばらなものを編集でつないだに過ぎません。ご指摘いただいたように、現実には起こった出来事とのあいだに決定的な「ズレ」があります。この指摘は重要で、3.11以降、膨大な量のイメージが生産されていますが、仮にそれら億単位のすべてのイメージをネットワーク化させたとしても、3.11 それ自体を表象できないのも同様の理由です。さらには、観る者の感性も多様かつ時代と共に変化するわけですから、厄災の記憶の継承はその方法論を持続的に

アップデートしていかないと忘却や歴史修正が容易に起こります。

ところで、今日の発表では研究者のみなさんが新聞などを参考にされていましたが、最初に大友さんから声をかけられたとき、100年後に新聞では伝わらないことがある、とおっしゃっていました。文字情報では伝わらないものを映像というかたちで記録に留めてほしいという言い方をされていて。新聞やメディアからは伝わらないものを伝えたい、というところが大友さんにはあったのかなと僕は思います。

大友／そう言ったかどうか覚えていませんが、僕なら言いそうですね。新聞で伝わることももちろんありますし、逆に映像では伝わらないものももちろんあって、そのことは当然、メディアの仕事を長年やってきた人間としては知っているつもりです。僕はテレビドラマや映画の仕事をたくさんやってきました。古い時代のドラマの音楽をつくる時には必ず当時の新聞や資料に当たるのですが、そこから見えてくるものや、想像力を豊かにしてふくらませていくものもあれば、どうしてもわからないこともある。ごく当たり前の、大前提のことが新聞には書いていないのです。「プロジェクト FUKUSHIMA!」もその大前提を共有できなければ、専門的な研究者が読み込まないとまったくわからないものになってしまうのではないか、と経験から思いました。100年経ったら、おそらく僕らが当たり前のように知っていることが伝わらない。それは結局、映像でも伝わらないと思うのですが、何かヒントを残せないかと思って、藤井さんにそう願いましたのだと思います。

100年後には僕はもう死んでいるからどうでもいいや、という気持ちも本当はあります。それでも何かを残したいと思ったのは、先ほど言ったように自分も過去の資料に当たることが多いということがひとつ。そういう冷静な視点がありつつも、はじめに福島に入ったときは音楽家としてではなく、ただなんとかしないと、放射能被害をなんとかしないと、という気持ちでした。でも、一音楽家で、学校もろくに出不ない僕が放射能被害をなんとかできるわけがない。ただ、みんなが困って動けなくなっている状況でも、おっちょこちょいな僕は動くことはできる。それなら自分は、こうしたら、ああしたらとみんなに言う係なんだろうと思いました。科学者を連れてきて話を聞けばいい、状況がわからないなら線量を測ればいい、政府が嘘をついているのなら自分たちで線量を測って公表してしまえばいい。そこまでは思いついた

のですが、悲しいかな、そこから先は結局何かをやるよとすると祭りや音楽になっていくんです。

けれどかなり強い直感で、祭りをやったほうがいいと思いました。理由は本当にわかりません。このわけのわからない脳みそをみなさんに研究してほしいくらいです。しかし、その確信は間違っただけでなかったと思います。なぜかという、あのとき、祭りをやるのに理由なんてどうでもよかったんです。神輿を運ぶのに理由などありません。ただ神輿を運ぶのなら、トラックで運ぶのが最も簡単ですよ。でも、わざと神輿を重くして、準備もわざと大変にして、みんなでわっしょいわっしょいと運ぶわけです。災害などの混乱した状況の中では大変になったほうがいいと僕は思っています。おそらくお葬式がそうなのですが、故人に近い人は、くよくよしているよりも葬式が大変なほうが気が紛れる。だから、なるべく面倒くさく祭りをやったほうがいい。線量も細かく測ったほうがいい。結局、僕が持っているスキルは、祭りをやることと音楽をやることしかないんです。

当時、納得がいかないかったのは、東京からたくさんミュージシャンが来て、それを福島の人が見るという構図です。そういうのはもういいや、と思いました。福島に来たミュージシャンのことを悪く言う気持ちは一切なく、もちろんそういう場もあっていいのですが、福島の側でも音楽をやりたい、と思いました。それが「オーケストラ FUKUSHIMA!」です。でも、そこに福島の人しか入れないのはいやで、それは差別にもつながる問題でもあります。プロでもアマチュアでも、誰でもやれる音楽を作らないと負けだと思いました。それがああいうかたちで音楽になり、藤井さんの映像に残った。自分のその後の活動にもつながっていった。

結局僕には、音楽でしかそういった問題を解決する技術がなかった、ということだと思います。映画を見るとわかりますが、音楽をやっているときだけ僕は生き生きした顔をしていて、他のときはもう、あまりに辛そうで自分で自分を見ていられないくらいです。だから、専門外のことはやるもんじゃない、という結論です（笑）。だけどやってしまったんですよ、あのときは。おそらく、これからもやってしまうと思うのですが。専門領域だと、自分の思想をちゃんと落とし込むことができるということなんだと思います。

もう1つは、藤井さんが言っていました、みんながくだらない話をしてなんとか心を支え合っているのを、僕だったら作品化するべきだと、それがコメディだと、当時は強く思いました。そのときに初めてコメディをやり

たいと思ったのではなくて、昔からクレイジーキャッツなんかが好きで、いつかやりたいとは思っていたのですが。一般の人とかプロとか、誰もが差別なくやるということと、コメディと、いろいろなものがあるとき福島でごちゃまぜになって盆踊りになっていたり、「オーケストラ FUKUSHIMA!」になっていったということだと思います。そこには、実は差別の問題も含まれているのですが、自分でもまだ整理のついていないところで、これからそういったものを含んだ何かを自分をつくっていくのだと思っています。10年経って、やっとそこにたどり着いたなど。だから、この先やることを見ていてください、という感じです。

有馬／第2部の飯田先生のご発表では「プロジェクト FUKUSHIMA!」をアクティビズムとアマチュアリズム、ローカリズム、その3つの意味でコミュニティメディアとしてとらえるというご指摘がありました。今の女友さんのお話を受けてコメントがありましたらお願いします。

飯田／半世紀のあいだにメディア環境は変わっても「コミュニティメディア」の理念や手法はずっと変わらず、アップデートされないまま今に至っているところがあります。地域に根ざした放送や新聞がコミュニティメディアだ、と。ただ、もうそういう状況ではなくなっています。たとえば、音楽を媒介するメディアといえば、かつてはレコードやCDなどのパッケージメディアが主力でしたが、近年は「経験経済」と言われるように、コンサートやフェスといったメディア・イベントの存在感が大きくなりました。「コミュニティメディア」という概念も、大胆に考え方を変えていく必要があると思います。もちろん、既存のコミュニティFMやケーブルテレビがすでに取り組んでいる記憶の継承については、しっかりと評価しないとイケないのですが。

「コミュニティメディア」という言葉が登場した70年代は、人の移動・移住が加速した時期でした。高度経済成長にともない、都市の郊外化が進んでいって、地域のあり方そのものが大きく変わってきているという現実をとらえなければならなかった。メディア研究者の田村紀雄さんが1972年に出版した『コミュニティ・メディア論』にもはっきりと、コミュニティというのは従来の地域ではなく、これから生まれる新しい共同体のあり方なのだと書かれています<sup>1)</sup>。地元に関じたメディアという意味ではないのだと当初は言われていたのですが、いつの間

にかそれが忘れ去られて、県域がローカルメディアで、それより狭いエリアのメディアがコミュニティメディアなんだと、そういう図式的な区分が広く定着していったと思います。

というのも、多くのケーブルテレビやコミュニティFMがいわゆる第三セクターで、パブリックなメディアというよりどちらかというとオフィシャルなメディアとして現実に運用されている中で、当初の理念が忘れ去られているようなところがあります。今日の発表ではまだ、あまりうまく話せなかったのですが、開かれたコミュニティメディアという理念をもう一度、メディア考古学的に掘り起こしたいと考えています。祭りなども含めて考えていきたいと思っています。

ロート／対談に出てきた「メロディではない」という話はとてもおもしろく、盆踊りの発想につながるかはわかりませんが、閉じられた共同体ではないものをつくることと、1つのメロディ、1つの物語ではないものをつくるというのが、なんとなく、抽象的なところでつながっているように思います。

飯田先生の発表の中で出てきたコミュニティメディアにもつながる側面があると思いますが、インターネットの共同体について研究している人の話を聞くと、共同体論でも「つながり」が歴史的に薄くなってきたという指摘が30年、40年前くらいからなされています。最近では、たとえば「ネットワーク」という概念に対する批判も表面化してきている。つまり、コミュニティメディアだったり、ネットワークだったり、固定していない共同体であっても、その力学が難しいというような指摘がされている。こういった批判があるからこそ、具体的な状況において開かれた共同的なものをつくることは非常に重要かつとても努力を必要とすることだと思います。コメントまでですが。

有馬／ありがとうございます。会場からの質問がいくつかありますのでお答えしていきたいと思います。まずは水出先生へ。「災害からの復旧・復興を目指すということは一刻も早く忘却するためだと思うので、忘却できない社会があったとすると、そちらのほうがむしろ問題だ」というとらえ方はできないのでしょうか」という質問です。

水出／つまり、忘却できない社会というのは復旧もしくは復興していない、という意味でしょうか。

美馬／災害のことが気にならなくなるくらいに完全に忘れてしまうことが復興だ、という考え方のことかなと思ったのですが。

水出／社会から完全に痕跡を消していくというかたちですね。そういう考え方もあるにはあると思いますが、ハードとソフトを分けて考えることもできると思います。都市の景観などが人々の記憶に作用することはありますが、都市から災害の痕跡が消えても社会的に記憶を維持することは可能だし、そのように災害の記憶を残す社会が不健全だとは思えません。また、この先に災害がない社会であれば消し去ってもいいのかもしれませんが、日本社会には台風もあり地震もあり、場所によっては火山もある。そうした条件を考えると、過去の災害の想起は大事な営みです。忘れ去ってしまうことこそが復興なのかもしれませんが、自然災害と共存している現状を踏まえると、復興のあり方としてどうなのかなと思います。

この話はなぜ災害の記憶を残していくのかという問いにつながっていくと思いますが、それに対するたった1つの答えは、おそらくありません。多様な理由を想定することが大事です。わかりやすい例として「防災」がありますが、これも複数のレベルがあります。次に起こりうる災害で適切な対応ができるために想起しておくというレベルもあれば、「防災」というアジェンダで社会を進めていくために記憶を重要視するということもありえます。関東大震災の記憶で言えば、1960年以降に社会的な防災のレベルを引き上げることに寄与しました。1970年代後半には社会における地震に対する認識がかなり上がっていき、科学的な地震予知を前提とした法整備もなされます。科学的に地震予知が可能かどうかという話はさておき、社会的に地震防災体制の整備が進んだ背景には、関東大震災の想起がありました。一口に「防災」と言っても、記憶が機能する場面は多様なわけです。さらに言えば、災害の記憶を残していく理由を「防災」に閉じないことも大事だと思います。

美馬／ある意味で、今の新型コロナの問題と重なるところと重ならないところがあるという話がみなさんからありました。僕もそう思います。それに関して、デジタル社会の未来という方向性で、少し述べたいと思います。

「プロジェクト FUKUSHIMA!」の映像からは、土埃を吸わないように布を引くというやり方もあるよねとか、「バクレル」などのいろいろな数字を理解しないといけないうね、という自分自身で健康を守ることを重視する価値観、それと同時に政府の公式発表やマスメディアの

言っていることは信じられないというカルチャーが一体化して、Do it yourselfとして自分で測定する自律的な生き方につながっていくことが見えます。そういったものが非常に強く出たのは3.11のときからかなと思っています。

そのある種の進化というか現在形が、たとえばアップルウォッチのような、自分自身をモニタリングする、セルフモニタリングの文化ではないでしょうか。モバイルな機械を通じて自分の歩数や心拍数、今で言えば体温、極端な場合は酸素飽和度をずっとモニタリングし続けるわけです。ただし、当時は、自分自身をモニタリングして自己管理していくのは、当時はガイガーカウンターをもって測ることで、マスメディアや国が垂れ流している「デタラメ」から身を守る目的だったものが、商業化が進んだ結果、その意味がちょっと違うものにずれてきているのがこの10年だなという感じを受けました。それが、自己管理や感染予防や自粛が求められる新型コロナの時代の窮屈さの一部にあるのです。そこが気になったのは、私が医療社会学の分野で言う自己トラッキングの文化に今興味を持っているからかもしれません。そういった数字や機器というメディアを通じて自分を理解する文化について気になるころがありましたら、みなさんにお伺いしたいです。

大友／国がやっていることが信用できない、だから自分たちで放射線量を測った。そのことはあの時点では間違っていなかったと思います。ただ、わずか数カ月後には政府からも正確な情報が出るようになっていきました。でも、国やメディアが言っていることが信じられなくなってしまうと、いくら正しい情報が出ても信じられなくなってしまう。正確さが検証できなくなると、自分の信じているものだけを情報として取り込むことになる。最近の陰謀論の背景にはそういうものもあるんだと思います。福島でもそういうことがありました。放射線量が低いという結果が出ると、「そんなはずはない」と言われてしまう。そんなことを言う人は、国側の、原発推進派の人間だと。それがこの10年間でいい方向に進んだかという、そうではないと思っています。個人で発信できる情報量も発信する人の数も当時より格段に増えたので、不正確な情報もまた同じように増えてしまい、さらに悪循環で陰謀論のようになっているのが現状だと僕は思っています。

もう1つ、震災当時と今とでは同じようにマスクをつ

けているところは重なりますし、大きな災害であることは変わりませんが、でも震災後は、人々が集まることができた。そこが震災後とコロナ禍の現在の最大の違いかなと思います。今は羽がもがれたような感じです。音楽家は人を集めるのが商売のようなところがあって、人が集まることによって音楽を実現したり、次のフェーズに行くことができます。アンサンブルを組む、すごい人数のオーケストラをやるとか。それが今はまったくできないので、そちらの方面からは打つ手がありません。人が集まれるようになるまでのあいだは、個人的には勉強の時間だと思うことにしています。

今回のシンポジウムも、当初は東京からオンライン参加という話もありましたが、できれば直接集まりたいとわがままを言ったのは、おそらくオンラインでやりとりをしても、気づきや議論が生まれなかったからです。できる範囲のギリギリのところまでなんとかして行こう、と今は思っています。

有馬／最後の議題です。災害とアート、あるいは出来事とアートといった問題を再考するのが今回のシンポジウムの目的でした。2部のまとめとしてロート先生がおっしゃったように、アートがどのような役割を果たすのかというところについて質問が来ていますので、最後にみなさんと議論したいと思います。

3.11以降の社会に関わるアートについて研究をしている方から、「逆に言えばアートへの注目の広がりというのは、精神医学や臨床心理学、社会学などの学問やその専門家が、大きな厄災に対して十分機能しなかった、コミュニティのトラウマに対して役に立たなかったからなのではないか」という指摘です。みなさんがなぜアートに注目するのか、また社会学やメディア学には何ができるのかという、非常に大きな質問をいただきました。

大友／科学者や社会学者のほうが僕より圧倒的に役に立っていると思いますが、アートは「役に立つ」という視点ではないと思います。でも、役立たずの人間がいてもいいと思うんです。何か災害が起こると、当然、初期段階では役に立つことが必要になります。ですが、人は役に立つことだけでは成り立っていないわけです。そして、僕らはむしろ役に立たないチーム。この先もっと、震災当時は役に立たなかった人が役に立ってきますよ。小説家とか。震災直後は小説家がいくら小説を書いたって役に立ちませんよね。

やはり、役に立つ／立たないという視点で考えないほ

うがいいと思います。そういうことではないんです。道路を作る人は、壊れた道路を直すのが役目です。でも、役に立たなくても別にいいですよ。アートは役に立つためにあるわけではありませんし、僕はむしろ役に立たないと言われたい。世の中の役に立って立ってたまるか、ノイズであり続けたいんだよ！というのが正直な僕の意見です。

藤井／大友さんのおっしゃるとおり、アートを「役に立つ」という括りでまとめることはかなり危険なことです。これまで、芸術は役に立つということでさまざまな悪事を働いてきた歴史がある。これは戦争のことを念頭に置いています。なので、批判的な距離はとりつつ、その一方でアートが社会の中で表現していく。「プロジェクト FUKUSHIMA!」は別にインスティテューションが守ってくれるわけでもありませんし、お墨付きのアートという括りでもない中でやってきたということと、学問やアカデミックの領域を飛び越えて社会の中で語りだしていく、または出てくるということはアートにももっと必要だし、学問ももっと必要ではないか、というのが日本学術会議の問題を含めて、あの問題に対する世間の無関心などを感じる今日この頃です。

有馬／役に立たなかったのではないかとされたメディア学、社会学の先生方、すみません（笑）。ご指摘に対して、またそれに対するアートへの注目について、研究者のみなさんに思うところをお話いただければと思います。

飯田／先ほども少し触れましたが、2000年代のあいだにアカデミズムの中で、メディアリテラシーやサイエンスコミュニケーションなどの実践研究が盛んにおこなわれ、市民とのコミュニケーションの回路をどういうふうに作っていったらいいかという、いわば“お膳立て”が検討されてきました。こうした考え方が2010年代に通用しなくなり、特に東日本大震災の直後、メディアリテラシーやサイエンスコミュニケーションの研究者がプレゼンスを発揮できなかったことは紛れもない事実だと思います。

サイエンスコミュニケーションに関しては、大震災と原発事故をめぐる議論が、サイエンスコミュニケーターが従来得意としていたアジェンダセッティングとはスケールがあまりに違っていただけあって、そのギャップをどう補正するのが今後の課題だと思います。私は

メディアリテラシー教育にも取り組んでいます。ここ10年、情報過多社会とも呼ばれる状況の中で、メディアリテラシーは「送り手のメッセージには必ず意図があり、それを批判的に読み取ることが大事なんだ」と言い続けてきたわけですが、インターネット上のコミュニケーションに関しては、ソーシャルBOTやAIの発展によって、そもそも送り手が人間なのかどうかさえよくわからなくなっているわけです。

こうした中でメディアリテラシーを再考するのであれば、たとえばプラットフォームを巻き込んで教育のあり方を考えていかないといけないでしょうし、そこにどういった人たちが介在すればそれが可能になるのか、その仲立ちをする仕掛けはどうあるべきかなど、これまでとは別のアクターやファクターを想定しないとけません。そういう開かれたコミュニケーションのあり方を模索していく中で、アートを媒介にして形成されているコミュニティやネットワークの可能性は、研究者にとっても刺激的で、ここから学ぶべきことが多いと思います。

水出／僕の研究はおそらく役に立たなかったグループに入りますが、僕自身は戦略的にそこを目指さなかったところがあります。社会学の中で体系的に災害の研究が始められるのは1960年頃です。理科系の研究がうまく取り組めなかった避難行動などの研究で重要な成果を蓄積していきました。しかし、社会学の価値はそこだけにあるのではないと思います。もっと広い価値があるというか、人文系だからこその研究は絶対にある。僕はそういう価値にフォーカスしています。

おそらく、「役に立たない」という批判は災害が発生した時点の話ですよ。そこに研究を閉じてしまうことがもったいないというか、見えなくしていることがあると思っています。拙著『〈災後〉の記憶史』を読んでもらえばわかるのですが、災害が発生した時点にはほとんど注目していません。災害が発生する時点に固執してしまうことで見えなくなっていた長い〈災後〉を扱い、その中でマスメディアという巨大組織がどのように機能してきたかということを描いています。「災害」を局所的に見るのではなくて、広く見たり、見立てを変えていくような研究も社会貢献できると思っています。

ロート／私は誰かを代表することはできませんが、自分のことを言うと、2011年は博士課程にいてビデオゲームを研究していたのですが、一瞬やめようかと思いました。電気をエンターテインメントのために消費するばかりのも

のをこの時代に研究してどうするんだという思いもどこかでありましたし、震災をきっかけにいろいろと思いを巡らせることになりました。それでもあえてこの研究を続けるということは、自分の研究対象や研究活動に対する批判的立場の重要性を改めて自覚し、追求するきっかけになったと思います。

そこはアートに似ている部分があるかもしれませんが、1つの評価基準に落とし込まないというのも、学問の力の1つだと思っています。「役に立つ」ということに対しても、いろいろな基準があっていいという認識もそうだと思います。たしか3.11のときも「電気の問題って考えたことなかったよね」などとよく聞きましたし、私も含めてそうなんです。しかし、その経験が意識を変えるきっかけにつながればいいと思います。常に批判的であり、自分の活動と少し距離を取って反省する姿勢を保てたらいいなと思っています。役に立つかどうかに関しては、誰が決めるんですか？と聞き返したいです。一方で、何かに向かっていく必要があるのはわかるので、その基準も含めて、学問なりアートなりが絶えず交渉し、決めるのではないかと考えています。

美馬／役に立たない人を集める仕掛け人になった者です(笑)。ロートさんが言われた通りで、役に立つ／立たないを決める基準は何か、ということを問うのが人文・社会学系の学問の基本的な役割です。その面では、役に立つ／立たないというところを念頭に起きつつ、は重要と思います。

関連して、もう1つ思いついたので言っておきます。風評被害や噂というもの、現在でいえばフェイクニュースは、サイエンスコミュニケーションの標準的な考え方だと、マイナスの存在で、消え去るべきものとみなされます。しかし、僕は、それは一面的な見方で、ちょっと違うと思っています。風評被害でも陰謀論でも同じように、その核になる情報というか偽情報を引き寄せて受け入れさせている社会的な何かがあると思うからです。現状維持ではなく、違う未来を求める想像力の表れであって、風評や噂が1つの大きな力となって社会を変えるかもしれない、そういう潜在的な力として考えていきたいのです。善用できるかもしれないし、できないかもしれない。そんな現状では役に立たないものに見える、想像力とも妄想ともつかない表れを読み取ることで、役に立つ／立たないという評価の軸そのものを問い直すこともできると思います。

有馬／私も企画を持ち込んだ人間としてお話しさせていただければと思います。個人的に今回のシンポジウムには大きく2つの目的がありました。1つは大友さんと藤井さんがつくられたドキュメンタリー映像を多くの方に見てほしいということです。もう1つは、どのような状況にあっても議論の場を作り続けることが何よりも大切だということに尽きます。今回のシンポジウムは、KYOTOGRAPHIEという京都市内で年に1度開催される国際写真祭が運営しているギャラリー兼カフェスペースをお借りして開催しています。新型コロナウイルス感染症により大学や公的機関が閉鎖されてしまう状況になり、リアルな議論の場をもつことが難しいときに、オルタナティブな場所の持つ可能性に改めて気がついたことは、今回とても大きかったと思います。

議論の場を作る、それも震災から10年の節目にやるということが何よりも必要だと思い、先生方と、大友さん藤井さんには東京からお越しいただき、KYOTOGRAPHIEスタッフの技術協力によりこの場をつくることができました。アートの現場と研究の現場は、まったく別のそれぞれの役割があるということではないと思いますし、今日この場を通して、非常に有意義な時間が共有できたと思っています。ありがとうございました。

## 注

- 1) 「コミュニティー・メディアは、その古い伝統社会にある「地方」ではなく、現代における都市社会のうちに芽ばえつつあるコミュニティーを育てる手段にほかならない。」田村紀雄『コミュニティー・メディア論——地域の復権と自立に』現代ジャーナリズム出版会、1972年。